

◇ シンポジウム ◇

シンポジウム

都市と人間

ここに掲載するのは、2005年3月1日「都市と人間」を共通テーマとして、Cチームの主催で開かれたコロキウムの報告をもとにまとめられた論稿である。

本学は1992年ハンブルク大学と国際学術交流協定を結んでおり、また2002年には文学研究科とドイツ「恵光」日本文化センターとの間で部局間協定を結んでいる。ドイツ「恵光」日本文化センターはその発足時より、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所の日本学研究室と学術交流を深めている。そうした経緯に鑑み、それぞれの研究機関から2名の研究者をお迎えし、今回のテーマでコロキウムを開催することとなった。

前半のトップバッター、かつて文学部最初の専任外国人教員として1988年から1992年まで勤務されたパウエル氏は、日中の仏教文化のみならず儒教文化にも造詣が深く、その幅広い研究分野から今回は伊藤仁斎の著作に見られる都市の人間のあり方について報告していただいた。続いて文学研究科との交流にご尽力くださっている宮崎氏には、きわめて今日的なテーマ「多文化社会」のドイツにおける実態について紹介していただいた。そこでは、わが国においてももはや他所事ではない多文化社会が抱える諸問題が具体的な事例を交えて提示された。

後半では「都市と宗教」という大きなテーマのもと、ドイツ都市における宗教、とくにキリスト教の世俗化およびグローバリゼーションという現代社会の焦眉の課題について、ノッテルマン氏に報告していただいた。ヨーロッパで急速に進んでいる宗教の世俗化の問題はわが国においてもけっして無縁ではなく、見方によればいっそう加速された様相を呈しているとも言えよう。その意味でこの報告は、われわれにとってきわめて示唆的な問題提起であった。最後にレーゲルスベルガー氏からは、ここしばらく集中的に取り組んでおられるテーマ「浄瑠璃における芸道論」を紹介していただいた。昨年、氏はCチーム主催のシンポジウム「都市のフィクションと現実」で「人形芝居におけるフィクション性とリアリズム——人形を論じるクライストと近松」と題する比較演劇論を展開されていたが、今回は近世日本の演劇を代表する浄瑠璃に限定した芸道論であった。

本コロキウムでは、都市に生きる人間の諸相が近世と現代の視点から批判的に論じられ、また参加者からの活発な質疑に対して適切な応答と補足説明がなされた。

(編集委員会)

日 時：2005年3月1日(火) 13:00～17:00

会 場：大阪市立大学田中記念館 第2会議室

研究報告(ただし、以下のタイトルおよび表記はシンポジウム開催時のもの)：

1. グレゴア・パウエル(カールスルーエ大学教授, ドイツ「恵光」日本文化センター客員研究員)
「都市と倫理 —— 伊藤仁斎の場合 ——」
2. 宮崎 登(ハンブルク大学講師)
「多文化社会とは何か —— 日本とドイツの比較 ——」
3. ヤン・マルク・ノッテルマン(ドイツ「恵光」日本文化センター研究員)
「都市と宗教 —— ドイツにおける世俗化とグローバリゼーション ——」
4. アンドレーアス・レーゲルスベルガー(ハンブルク大学講師)
「浄瑠璃における藝道論」